

## 論文審査の結果の要旨

氏名：福本 宗子

博士の専攻分野の名称：博士（歯学）

論文題名：お口の健康状態が超高齢者の幸福感におよぼす影響

－東京都心部に在住超高齢者への横断的健康調査－

審査委員：（主査） 教授 植田 耕一郎

（副査） 教授 祇園白 信仁 教授 小宮山 一雄

（副査） 教授 松村 英雄

平均寿命の延伸は、年金、介護、医療などの経済的あるいは社会的問題を提起し、高齢者の日常生活を脅かす多くの課題を含んでいる。これらを解決する対策として最も重要と考えられるのは、高齢者が身体的にも精神的にも自身の健康状態を維持することである。そのため、加齢に伴う身体的および精神的变化を分析し、これらが高齢者の健康状態におよぼす影響とその関連性について検討する意義は大きいといえる。

そこで本研究は、超高齢者の口腔状態や身体的、精神的機能あるいは疾病の有無が、口腔に関連する QOL や主観的幸福感におよぼす影響、さらにこの両者の関係について検討を加えた。

本研究では、東京都新宿区、港区、渋谷区の住民基本台帳より無作為に抽出し、慶應義塾大学病院老年内科への来院に同意した 85 歳以上の超高齢者 417 名（男性：195 名、女性：222 名、平均年齢 ± SD：87.3 ± 2.1 歳）を対象とした。

口腔状態に関する調査は現在歯数、最大咬合力、唾液分泌量などについて行った。さらに、口腔関連 QOL の評価として General Oral Health Assessment Index (GOHAI) および咀嚼能力を調査した。身体能力の評価は、握力および time Up & Go test で行った。また、面接にて、調査対象者の基本的属性を、精神機能の評価に PGC Morale Scale (PGC) および WHO-5 を用い調査した。認知機能の評価は MMSE を用いて行った。さらに、activities of daily living (ADL) を Barthel index にて、instrumental activity of daily living (IADL) を Lawton scale を使用して評価した。

その結果、以下の結論を得た。

1. 口腔関連 QOL として用いた GOHAI は、ADL や口腔機能に関する項目さらに主観的幸福感に関する評価項目 (PGC および WHO-5) とは有意な関連性を有していた。
2. GOHAI は現在歯数、最大咬合力、摂食可能食品数と有意な関連性を示し、GOHAI は生命維持に必要な不可欠な臓器としての口腔の機能レベルと密接に関係することが明らかとなった。
3. これまでの研究から、人の幸福感は生活状態や教育、友人関係、年齢などが強く関連すると報告されていたが、本研究の結果では、これまで影響が大きいとされていたこれらの項目に影響を受けることなく、超高齢者の主観的幸福感 (PGC, WHO-5) と GOHAI とが強く関連していることが明らかとなった。
4. 本研究結果において、超高齢者において摂食、嚥下および発音に関する機能は様々な身体的機能と相関しており、超高齢者の要介護になる原因疾患は必ずしも疾病ではなく、むしろ食生活の影響力が伺え、超高齢者にとって満足度の高い食生活が必要と推察された。

以上の結果から、GOHAI を高い値で維持することは自己効力感を高めることにつながり、超高齢者の自立した生活を実現することになる。そのため歯科医療は、口腔機能の維持、改善に務め、超高齢者が自立度の低下を招かないような環境整備をすることの必要性が示唆され、高齢者歯科医療分野に寄与するものと考えられた。

よって本論文は、博士（歯学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 27 年 3 月 11 日